みんぱくミュージアムパートナーズ

―脱皮する博物館ボランティア―

石川 梨絵
（いしかわ りえ）
情報企画課情報企画係

2004年9月に発足した「みんぱくミュージアムパートナーズ」。
博物館のパートナーとして、自主的に活動を提案し実施することをめざす。
夢の企画を実現すべく、2コマ進んで1コマ戻る試行錯誤の連続を
特製「自主企画実現双六」で紹介する。

博物館で何かをやってみたい

お客さんとして博物館を訪れることに飽き足らず、もっと積極的に博物館にかかわっていきたいと思い、それを実践している人たちがいる。全国の博物館で展示場の案内や展示物の解説、体験型展示の補助、資料の整理などの活動に携わるボランティアである。最近では開館前からボランティアを募集する博物館もめずらしくない。昨年一〇月に開館した九州国立博物館では、約二九〇名のボランティアスタッフが数カ月に及ぶ事前研修に励み、開館に備えていたという。

民博では一九九八年の特別展「大モンゴル展」の際に初めてボランティアを募集した。民族衣装の試着や遊びのコーナーでのボランティアの活動が好評を博し、その後の特別展にもたくさんの方にボランティアとして協力をいただいた。二〇〇四年には、大学共同利用機関の法人化を機にボランティア活動を見直し、館から依頼された仕事をする「民博ボランティア」ではなく、より積極的に博物館活動に参加する「市民パートナー」へとボランティアの位置づけを転換した。博物館で何かをやってみたいと思う人が、より主体的に活動に取り組むことのできる場として、民博を開いていこうとしているからである。最初のパートナー募集には一五〇名あまりの賛同者を得、二〇〇四年九月より「みんぱくミュージアムパートナーズ（MMP）」が新たなスタートを切った。

MMPのメンバーには、民博友の会会員や、民博ボランティア時代から活動していた人に加えて、新しくパートナーとして名のりをあげた人も少なくない。参加した動機は、大好きな民博のことをほかの人にももっと知ってもらいたい、人と触れ合うのが楽しい、なんらかの形で社会と交流をもちたい、民族学や関連諸分野の学問に興味がある、異文化理解を通した人権教育に携わりたい、自律的な組織としての市民活動の立ち上げに参加したいなど、さまざまである。

「みんぱくミュージアムパートナーズ」主催のワークショップ会場の様子

作品制作するワークショップ参加者たち

こうして集まったメンバーの最初の活動の場となったのが、二〇〇四年秋の特別展「アラビアンナイト大博覧会」である。私が民博情報企画課社会連携グループのスタッフとして、MMP担当になったのも、このときからであった。民博から協力を依頼した展示場での補助的な活動のほかに、MMPの自主企画として、アラビアンナイトの物語を素材にした塗り絵の作成や、アラビア文字の体験ワークショップ、紙芝居の上演、触って楽しむハンズオン・ワゴンの製作などを実施し、来館者に好評を得た。これらの企画はMMP内部、また民博とMMPのあいだで話し合いを繰り返し、長い時間を費やして実現していったのである。

自分たちの企画を実現させる

博物館や美術館を訪れて、いろいろなワークショップやイベントに参加したことがある人は少なくないだろう。こうした活動は、ボランティアが支えていることが多いが、それを知っている人は意外と少ないようだ。また、ボランティアが、現場で実施のサポートをしているだけなのか、自分たちで企画を立てるところから始めているのかは、外からではなかなかわかりにくい。しかし、そこに博物館におけるボランティア活動の位置づけ、それに応じたボランティアコーディネートのあり方、そして社会との連携に対する博物館の姿勢が反映されているのではないだろうか。

民博とMMPは、その協働のしくみを両者の話し合いにより、作ってきている。民博がMMPに対し、展示場での案内や体験コーナーのサポートといった活動を提案する場合は、準備や管理運営を民博が担当し、MMPは現場でのサポートをおもな活動としている。MMPが提案した企画については、必要に応じて民博が助言をおこない、MMPが試行錯誤を重ねながら、企画から運営まで自主的に取り組んでいる。このMMPの自主企画はどのようにしてできあがるのだろうか。

「自主企画実現双六『つくってワクワク僕のわたしのブリコラージュ』ができるまで」は、二〇〇五年春の特別展「きのうよりワクワクしてきた。」において、二人のMMPメンバーが中心となって、自主企画ワークショップを実現させるまでのプロセスを双六にしたものである。一つひとつのコマは、このワークショップの準備の過程で出合ったさまざまな課題や面倒な手続き、思わぬハプニング等をあらわしている。では、この双六にそって、楽

ボランティアメッセ2005（山口県萩市、10月）、第10回ひとはくフェスティバルでも（兵庫県三田市、10月）展示された「自主企画実現双六」

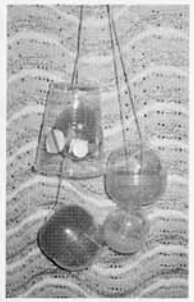
しい博物館イベントの舞台裏がどうなっているのかをお見せしたい。

『ふりだし』

この双六のスタートは民博側が開いた特別展の説明会である。展示の趣旨や計画の説明を受けたMMPは、自分たちに何ができるかを考えた。

最初の課題は、意見のとりまとめだった。MMPはいくつかの目的の異なる活動グループに分かれている。年齢も性別も背景も多様な人びとが集まってひとつの活動を一緒におこなうという市民活動ならではのおもしろさが、逆に難しさとなって彼らの前にあらわれた。自分たちで一から準備をしてワークショップをやってみたいという人、現場で来館者と交流することが楽しいという人、手伝いはしたいけれど取りまとめるのは遠慮したいという人など、さまざまな人がいた。アイデアはいくつか出てくるものの、手を挙げてとりまとめようという人が出てこない。そうしているうちに特別展は開幕し、企画は立ち消えになるかと思われた。しかし、この特別展で何かをやってみたいという思いをもった二人が中心となって周囲に声をかけ、企画が進められることとなった。

撮影用スタンドに作品を乗せて



ガチャガチャのケースを再利用した作品

当日の仕掛け人たち

『一回休み』

ワークショップの趣旨は、特別展でアーティストたちが表現した「ブリコラージュ＝身のまわりのもので作る世界」を見て刺激を受けた来館者が、自らブリコラージュ・アーティストとなって作品作りをするというものである。内容は大人も子どもも参加できる簡単な工作とし、雑誌のページを切り抜いたり、紙コップ、ヒモ、ボタンなど身のまわりにある物を自由に組み合わせてオブジェやハガキを作る。そして希望者の作品は会場に展示され、ハガキは特別展終了後に本人に届けられるという企画だった。

モノ作りが好きな二人が中心となったことで、きっと楽しいワークショップになるだろうと思っていた矢先、二人から運営に関する相談を受けた。グループで話し合ううちに「毎日参加体験できるコーナーにしたい」という意見が出て、どうしようか迷っているということであった。MMPが自主企画を実施する際には、できる限り自律的におこなうことが基本である。ワークショップを毎日開催するためには、メンバーのスケジュール調整や活動内容の周知徹底、物品の管理、活動状況の報告と把握等をMMPメンバー自身でおこなえることが条件となる。また、メンバーが内容を十分に理解せず活動し、ワークショップの趣旨が来館者にきちんと伝わらないという事態は避けたい。それよりは積極的にかかわれる人が、質の高いワークショップを来館者に提供するほうがよいのではないか。これらのことを考えた結果、彼らは「やりたいと思う者がやりたいことを責任もってやる」一日だけのワークショップをおこなうという結論を下した。

『二コマすすむ』

企画内容がまとまったら、MMP理事会と民博の両者から承認を得なければならない。審議のポイントは大きく分けると、活動が民博の目的と合ったものであること、運営管理に無理がないかということのふたつである。この企画審議は民博がMMPに協力を依頼する際にもおこなわれ、やはり両者によって承認されることが必要となる。自主的な活動だからといって勝手にやっていいと思う人はいないだろうが、手続きが面倒だと思う人はいるだろう。しかしこれは民博とMMPの協働のしくみとして、欠かすことのできないステップである。このワークショップ企画については、MMP理事会と民博の双方から、趣旨も適当であり、実現可能性にも問題がないと判断され、実施が決定した。

ここまでくれば後はやるべきことをやるだけ。ワークショップの準備にどれだけの時間と労力をかけるかは、モノ作りに対する二人のこだわりにかかっていた。そして迎えた当日。特別展示場一階のメインの広場が会場となったため、多くの来館者の目にとまり、ワークショップは一日中にぎわった。参加は随時受けつけ、MMPが簡単にやり方を説明した後は各自が作品作りに没頭。気に入ったものができたらタイトルをつけ、MMPが作品と作者の写真を撮り、できあがったブリコラージュ・アートは次々と展示され、新たな参加者をひきつけていた。会場に残されていた参加者からのメッセージには「今日は、正解も不正解もないモノ作りの世界に浸ることができ、いやされました。みんなの作品も見てもらえて、すっきりしました」とあった。参加者が一日だけのブリコラージュ・アーティストとなって楽しんでくれた。企画は成功したといえるだろう。

会期終了まで会場で作品の展示をおこなった。展示台ももちろん自作

『あがり』はどこに

無事、ワークショップが実施できたことには大きな達成感があった。しかし、これで双六は『あがり』なのだろうか。当日、ワークショップが終了し片づけを終えたころ、残ったメンバーが口々に感想を言いはじめたため、当初予定にはなかった反省会をその場でおこなうことになった。準備の大変さ、当日の不安、みんなの協力、来館者への態度はあれでよかったのか、次回の課題など、興奮冷めやらぬ口調でそれぞれが感じたことを語った。ワークショップをやりっぱなしにせず、次の企画に今回の反省を活かしていこうというメンバーの気持ちが伝わってきた。

中心となった二人は後の報告書に、「自分が思い描いていることをみんなに伝えること、意見をとりまとめることの難しさ。（目的意識を）共有して企画を実現させることの大切さ、大変さなど、『学び』が多かった」と書いている。あの反省会の時間が自然発生的にできたのは、彼らが民博での活動に手ごたえを感じ、次のステップへと進もうとしていることのあらわれでもある。博物館で市民が自主企画を実現させるまでのプロセスは、決して簡単ではない。しかし、自らの手で企画を練り上げていくことで得られる達成感は、ほかでは得られないものがある。博物館は、何かをやってみたいという市民の思いを、どう受けとめ、どう支援していくことができるのか。こちらも二コマ進んで一コマ戻る、試行錯誤の連続である。

表紙モノ語り

むかしむかしのイヌの話

年末年始展示イベント「いぬ」出展作品／十二支土鈴（標本番号H142413、高さ11cm　幅5.1cm　奥行7.4cm／下左）、他7点

近藤 雅樹
民族文化研究部

戌は一と戌（ほこ）から成り、作物を刃物で刈り取り、束ね締めること、つまり収穫をあらわす象形文字である。新春早々、縁起がいい。縁起がいいのは安産・豊穣・繁栄の象徴とされる動物のイヌも同じ。花咲爺さんの愛犬は、裏の畑でここ掘れワンワン！正直者のお爺さんに宝物を発見させる。

むかしばなしの「花咲爺」は、もとは各地にいろんな口伝えがあったのだが、教科書にのせられたり、小学唱歌にされたりした結果、「桃太郎」と同じく今日のわたしたちが知っている以外の筋だてが忘れられてしまった。むかしむかしのイヌの名前が「ポチ」であるはずがない。そういえば、富山地方に伝えられていたおはなしの語りだしは「桃太郎」とそっくりだった。川で洗濯をしていたお婆さんが、流れてきた大きな桃を拾って帰り、臼のなかに入れておいた。柴刈りから戻ったお爺さんが臼のなかをのぞいてみると、桃ではなくかわいい子犬が入っていた……。美しい香箱に入って流れてきた、海神から授かったなどというところもあった。灰を撒いたら花が咲くのではなく、雁を捕まえてめでたしめでたしという結末もあった。「雁捕爺」というそうだ。

イヌは、人類がもっとも早く使役するようになった動物だと考えられている。そして、世界中で飼われている。ヨーロッパ人と接触するまでイヌという生きものを知らなかったのは、アンダマン諸島民と、一九世紀に絶滅させられたタスマニア島民だけだったという。

表紙の写真は、今年の干支にちなむ土鈴の数々（津村重一コレクション）。社寺で授かるものが中心である。上の三点は、誉田八幡宮（羽曳野市・左）、祐徳稲荷神社（鹿島市・中）、法輪寺（京都市・右）から授与される戌年の土鈴。三つめは、達磨をのせている。